

日本醫史學雜誌

第11卷 第1号

昭和39年5月24日発行

第65回日本医史学会総会講演要旨

特別講演

日本整形外科発達史…………… 蒲原宏…………… (1)

会長講演

大学東校生徒大野九十九と「解体学語箋」… 小川鼎三…………… (3)

一般発表…………… (細目表紙裏参照) ……………… (6)

昭和39年5月24日開催

会場 順天堂大学医学部5号館講堂

会長 小川鼎三

通巻第1359号

日本医史学会

東京都文京区本郷1~1
順天堂大学医学部医史学教授室内
振替口座・東京 15250

第65回日本医史学会総会一般発表要旨細目

- 「童子経」と「救療小児疾病経」にみられる鬼神について……………杉田 暉道 (6)
- 西域出土医薬関係文献解説目録……………三木 栄 (6)
- いわゆる落人部落における保健業……………今市 正義・今市 賀子 (7)
- 山脇東洋の「外台秘要」の出版……………羽倉 敬尚 (7)
- 並河天民自筆稿本「雑療方」について……………赤松 金芳 (8)
- 吉田長淑と加賀藩……………津田 進三 (9)
- 本間玄調の伝記について……………大鳥蘭三郎 (10)
- トーマス・バルトリン著、解剖学書の1653年版と
1656年版の図譜の比較……………森 優 (11)
- 郵便切手に描かれたオーストリアの医学者……………古川 明 (11)
- 「カスバル十七方」について……………宗田 一 (12)
- フーヘランド「原病学」とリセランド「人身窮理書」……………阿知波五郎 (13)
- 未知のシーボルト関係資料について……………中野 操 (14)
- 尾台榕堂の生い立ち (第1報) ………………吉田 一郎 (15)
- 明治初年における皇漢医道御用掛の医史学的意義……………石原 明 (16)
- 同志社におけるベリーとリチャーズ……………長門谷洋治 (17)
- 明治期輸入医学の研究様式と研究手段との関係
——比較医学史の方法のための試み——
……………野村 拓・山城 正之 (18)
- 明治前期における衛生行政の展開過程……………松田 武 (19)
- アメリカの医史学者を訪ねて……………鮫島 近二 (20)
- 封建制下の農民の保健状態 (第1報) ——過去帳その他古文書利用による畿内
山村の人口変遷——
……………松田 武 (20)

第六五回日本医史学会総会講演要旨

特別講演

日本整形外科発達史

蒲原 宏

日本の医学分科史のなかで最も系統的な分科史的研究に欠けていた日本整形外科史について先人が遺した文献を系統的に整理し、書誌学的、社会史的、治療史的、疾病史的な立場から検討を加え、現代における異常な発達をなしてきつたあるこの医学の一分野に関する沿革を明かにしたい。

日本における整形外科的疾患治療の分野が医学の一分野として独立の萌を生じたのが十八世紀中葉であり、世界整形外科発達史の立場からみても西欧と大略同じ時代であつたことを指摘したい。

骨関節疾患を取扱う医師が日本における実証的解剖学研究の一翼を担つており、その研究を基として合理的な治療法を發展させていつた事実についてまたこの發展した技術が一家、一流の範囲に限定させられたために、治療技術の非公開、秘伝化という方向に墮落し、西欧における肢体不自由者の救済というヒューマンズム精神を基調とした高次医学の一分野として發展する機会を自から生み出すことができず、自滅への道を歩んで行つた社会的、思想的背景について指摘する。

近代における日本整形外科の発達は、一九世紀初頭の西欧医学書の翻訳による外科学及び軍陣外科学知識の輸入にその由来を發しており、それが明治末期に至つて外科学の機能的分科の要求が高まることによつて、田代、松岡、住田三氏

の海外派遣となり正統な基礎が確立された。化学療法と日本の金属基礎産業と麻酔学の発達がその発達を促進させ、さらに社会的な要求が整形外科学をして二十世紀後半において爆発的な発展にまでおしやつた原因である事実を論及する。

しかも今後における発展の方向となお欧米整形科学の追従性がある事実と社会保障との関連について言及する。

(新潟大学医学部講師・県立ガンセンター新潟病院整形外科)

大学東校生徒大野九十九と「解体学語箋」

小川鼎三

明治四年文部省官版の「解体学語箋」と題する紙数一〇六ページの小冊子があり、日本の解剖学用語集としては最初のものと思われる。英文の扉に著者の名前は Ohno Tsokkomou とあり、Tōkei, 4th Year of Meiji とある。東京をトウケイとよんでいる。本の表題が若干誤りのある英文で書かれ、内容の解剖学用語はラテン語と英語が混じている。当時の英語熟を反映する著作であり、縦書きに印刷されている訳語がすこぶる正確である。

教官某が辛未冬十月の日付で題言を書いている。「東校ノ教師謨爾刺兒氏曾テ生徒ニ誠テ曰ク医生ニシテ羅句語ヲ識サル者ハ復医生ニアラス」で初まり、ドイツ教師ミユルレルがその年の八月に來任してさつそく右のごときことを述べたのがわかる。また大学東校の称が四年八月に廃されて冬十月は単に「東校」であり、東校の学制が大改革のときであった。題言のつづき「……内舎生大野九十九嘗テ解体書ヲ讀ニ方テ旁ラ人身ノ筋骨臟腑及経絡等ノ名称概ネ其羅句ニ係ル者ヲ鈔録シ吾邦語ヲ対訳シ一小冊子ヲ成シ仮ニ解体学語箋ト題シ以テ自ラ藏ス其志勤タリト謂フヘシ因テ今官其稿ヲ購ヒ更ニ校正ヲ命シ之ヲ鉛版ニ印刷シ以テ在舎ノ生徒ニ頒ソト欲ス……」とあり、大野九十九が自らの勉強のために作つていたのを政府が買いあげて印刷に付したことがわかる。教官某がたれであるか判らないが、後に述べる書類から推して長谷川泰である可能性が大きい。長谷川は明治二年十月四日に大学少助教、同じく十月十八日に大学中寮長となり、三年正月二十七日に大学中助教に昇任していた。彼が題言を書いたかどうか分らぬが、少くとも長谷川がその出版に尽力したことは

確かである。

さてこの優等生大野九十九の素性人物を知りたいが、まだ次のような断片的なことしか分らない。越後の高田の人であつて、改訂高田市史によると藩士大野真吾の弟であり、高田の下職人町に嘉永年間から業を開いていた蘭学医、竹内大安に洋医学をまなんだ。竹内は信州の人で高田では初めての洋方医であつたという。これで見ると大野九十九は大学東校に入る前から相当に洋学の知識をもつていたのであろうか。

この大野が大学東校を勝手に退学するという事件がもち上つた。東校をやめて南校に入舎していたらしく、それが判つて大学東校は高田藩に問責した。大学東校の規則第七条に「正則生ハ留学五年ヲ期トシ変則生ハ三年ヲ期トス、但期満タサレハ事故アリ退校ヲ願フトモ決シテ不許事」とあり、勝手な退校を認めないのであつた。当時の往復文書の写しがいま東大に残つている。

辛未（四年）六月二日付で大学東校から大学南校へ「高田藩大野某ト申者御校入舎罷在候由入舎相成居候ハ何等之者証印ニテ有之哉詳細承度此段申入候也」

これに対して大学南校からの返事はやはり六月二日付で

「御申越之趣致承知候取調候処

英学 高田藩 大野真次

未二十四才

右証印 同藩 岡島大属

右之通ニ有之候此段及御報候也」

この大野真次が大野真吾の弟九十九であるらしい。そのすぐあとで大学東校から高田藩へ問責の手紙が行つたと思われるが、それはいま見あたらず、高田藩からの陳謝の文が残つている。四年六月七日付である、「当藩大野九十九退校願之

儀ニ付御尋之趣……同人呼出シ相糺候処……熟々相考候処洋学ノ全体上ヨリ基礎根脚ヲ立されは徒に医術之一科而已専門ニ修業候共全ク成業ノ程如何可有之哉……一途ニ考込且且局監等蒙仰候者未熟ノ同人ニ於テ過重之至……一体東校南校とも洋学部中之儀ニ御座候得は転学仕候も不苦儀にも可有御座哉と輕易ニ相心得候ヨリ彼是行違不都合之次第ニ相成候段……尤同人儀早々南校退舎為相願藩府へ差戻之候上相当之処分も可仕候ニ付……何分とも御寛大之御沙汰奉願度……」とある。

これで見ると大野九十九は大学東校の方針にあきたらず医学はもつと基礎からやらなければと考えて勝手に南校に移つたらしい。しかも東校では「局監」という役目が与えられ俸給がでいたので大学東校は憤慨したようである。

またそのあと直ぐに六月十日付で高田藩から大学東校あて、大野九十九から御買上げ願つた字書代料金二十兩を当人に渡したのでその受取証を送るといふ手紙の写しが残っている。その手紙には大野へ二十兩渡したところ、彼はこの本ができ上つたとき百部じぶんにくれるか、又は百部分の代金をくると長谷川中助教を介して岩佐大丞から御達しがあつたと承知している。この二十兩は百部の代金全部なのか、その一部だけを先ずいただいたのか知らせてほしいと書いてある。

文部省官版のせい「解体学語箋」には定価が付記されていない。

大野九十九がその後いかなる生涯をもつたか知りたいのであるが、今のところ明治八年内務省の衛生局の職員に同人とおもわれる名前をみたのみである。(会長・順天堂大学医学部教授)

「童子経」と「治療小児疾病経」 にみられる鬼神について

杉田 暉道

原始仏教団に於ては、世俗の咒術密法を行うことを嚴禁した。しかし大乘仏教では、部分的にこれが取りいれられているので、大乘經典の中には、多数の陀羅尼が説かれている。四世紀に至ると、咒法だけを説く独立の經典が成立するに至つた。ここに述べる二つの密教々典も、小児の疾病の原因をいわゆる鬼神に求め、これについて興味ある事を述べている。童子経では鬼神を十五あげ、これら鬼神の形と、これらが小児の体内に入つた時に起こす症状を述べ、これを追い払う咒句について記されている。治療小児疾病経では、鬼神を母鬼と称し、十二挙げている。これらの母鬼は小児の年令等によつて、体内にとりつく種類がきまつているのである。また、その症状、さらにこれを治す咒句もそれぞれきまつているのである。

このような、二つの經典について、その成立年代の考

察、鬼神の異同、密教における重要性等について比較検討を行なつたので、その大要を報告する。

(横浜市大・公衆衛生)

西域出土医学関係文献解説目録

三 木 栄

昨春の本学会席上で、私は、西域出土のスタイン・ペリオ・大谷・その他医薬関係文書類の概要目録の騰写刷を配布し、これに若干の説明を加えた。その後引き続き調査を重ね、ここに漸く標題のような論稿を纏め得るまでに至つた。これは勿論不備であるが、近く「東洋学報」の五月号と八月号と二回に分けて掲載公表することになつている。本論稿は、私の中央アジア医薬史研究の出発であり、今後一つの資料ともなるものである。

思うに、今まで発表された医学史の成書は、主として西欧を中心として編まれてあり、東洋のことを無視しているようである。すなわち、医学なるものの世界共通性、その一回各時代東西間に生じる医学発達の差異、医学の基盤と

なる各種医論医説の相似性、中世紀までの東と西との医学進歩の対等、実理研究方法実施の東西間の比較、などに就いて妥当な検討が与えられず、意達せず未明のままに置かれていると考えられるのである。私の希望するのは、以上のことどもを事実を提示して証明し、東西全人類が認容する世界医学史の成立にある。これを達成しようとして、前途には多くの困難な問題が横たわり老齢の私には成就し得ないことと惧れているが、その一助として西・南アジアを連ねる中央アジアの医薬史―これは世界医学史上の空白地帯である―の研究を開始し、ここに多少とも研究指針ともなればとて本稿を草したのである。

(大阪府堺市熊野町・内科)

いわゆる落人部落における保健薬

今市 正義
今市 賀子

世に貴種の後といい、または源平藤橘の末葉と称し、時代の勢いに抗しきれず、人跡まれな山岳地帯に幽居した

人びとや、漂泊流離を宿縁とする人たちの健康保持は、どうして全うされてきたか、古往今来、伝説のつぼに封せられて開くことを拒んでいたかの感がある。演者は、肥後五家荘より阿波に伝えられた小児薬、京洛堀川を源とする家伝薬、近江国東小椋荘のろくろ師が、天正年間、はじめて氏子駈に携行した流布薬を通じて、その一毛を内示しようとする。

(徳島市明神町・郷土史)

山脇東洋の「外台秘要」の出版

羽倉 敬尚

山脇東洋(一七〇五〔宝永二〕—一七六二〔宝暦十二〕)が宝暦四(一七四七)年わが国で初めて医家として人体解臟を主宰実行した(五年のちの宝暦八年再び遂行)見識と熱誠は、唯我国医学史上に於ける驚異事実だけでなく、我民族文化の進展の面に於ても頗る注目すべきことである。

東洋のここに至る迄には壮年から(碑文年十三始めて医学を学ぶ)異常の勉強特に医書の博き涉獵に依つて識能を単

に頭脳中に考察した理論として止むることなくこれが実証を把握確認せんとした強烈な敢為的精神が涵養されたことに基づくことは知られるがこれが根柢はこれの学的準備でありこれが所期の如く果を結んだので真に學術兼備（元丈の序中の語）が証せられるのである。

茲にその具証の一つとしてこの解剖の約十年前即ち四十才前から中国唐代の王燾（トウ）撰するところの中国唐代の稀本医書「外台秘要」四十卷の翻刻出版に着眼しこれの準備にとりかかったことが挙げられる、そして此時その底本となる善本を博搜してこれを亡養父道立の門弟で兄視しておる（二十年の長）幕府医官野呂元丈に謀り且つその蔵するところの明版本の借用を申入れた。元丈は全幅的にこれを賛同し自蔵明版よりも善本である幕府秘庫尚蔵の宋版本との対校を同僚医官望月三英に懇請し遂に当局の認可を得てこれを対校して東洋に送り東洋はこの対校本を底本とし莫大な私費を投じて延享二（一七四五）年完成を了つた。翌年十二月長男東門と共に江戸に下り新將軍九代家重に謁し就任の賀辞を述べこれを贈呈し賞褒の資物を領受した。更に翌年七月には同じく元丈を通じてこれを中国に遺贈しておる、東洋は自序の末尾に

此挙（出版）タルヤ望（三英）ノ奨励ノ致ストコロニ居ルト雖、実ニ国家仁恩ノ及プトコロ也（秘府本の対校を得たる感謝）豈ニ感載セサラシヤ豈ニ感載セサラシヤ
大日本延享三年丙寅九月医官平安山脇尚徳（東洋の諱）
謹序

と記しておる。その恭謙周到な態度は高邁な識見と共に真に頭の下るを覚える

今その刻本の元丈作るところの後序（跋）について又この原本である「外台秘要」の伝来について時間の許す限りその梗概を述べて、先哲東洋の文功を追偲する。この出版の木版の版木は明治後中国楊守敬がこれを買得したとのである。
（東京都港区青山南町・史学）

並河天民自筆稿雜療方について

赤松 金芳

並河天民（1679～1718）は儒学を伊藤仁斉に学び、東涯とともに古義学派の双壁であるが、仁斉の仁義性情説に疑をいだき、「情性心解」、「疑語孟字義」などを著わして

仁斉の説に反対した。また、仁斉は儒の医を兼ねることを排斥したが、天民は、京都で儒を業とする傍ら医術をおさめ、『此の国の人の恒録なきものは、宜しく岐黄を兼ねべし、偏に儒を以て居れば則ち産支え難く、或は其志を固する能わず』とし、儒の医を兼ねることを是としたので、その門人には、山脇東洋の弟である清水敬長や、吉益東洞の師である松原慶輔などの儒医が多い。そして天民の医学系統は、古医方に属するものと思われ、奥村良筑なども、また、天民に師事した。

天民の自筆稿本といわれる「雑療方」は、その表紙に

『並河天民自筆遺書

藏書印渡辺氏、天民高弟渡辺毅（通称貫藏）、表紙題書「天民後裔尚教筆、尚教（号立斉）予之祖父也』との朱書がある。

本文の内容は、備忘録乃至治験録のようなもので、殊に民間療法的の記載のものが多く、表紙裏にも『湯治説』につき述べられている。

また、巻末には、薬物名が約一五〇種ほど列挙せられ、その和名が附記されている。そして、その中、人参、黄芩、独活、升麻にはいずれも『非真』とし、また『船上薬品当

及見者』としては、自然銅、蛇黄、不灰木、阿魏、藜芦、元花、大戟、亭歴、陶砂が挙げられている。その他、本書中には、にハブテコブラ、反魂草にカッテルヘテレスを充て、またエンネレ、ルウダなど初期の和蘭系物名の見えることは興味がある。

（昭和薬科大学・薬史学）

吉田長淑と加賀藩

津田 進 三

吉田長淑は初めて「蘭方内科」を標榜したことでも有名であるが、彼はまた加賀藩における最初の蘭方の藩医であった。即ち文化七年宇田川玄真の推せんにより、藤井方亭と共に加賀藩に祿されてから、文政七年前田斉広の病篤く急ぎ招かれて金沢へ向う途中発病し遂に金沢において死去するまでの十四年間長淑は加賀藩医であつた。

然るに終始江戸住であつたためか「加賀藩史料」その他の郷土資料に長淑の名が見られることは、驚くほど少ない。従つてこの方面からは期待した成果は余り得られなかつたが、多少知り得た事を申上げて御叱正を賜りたいと思

う。即ち、

一、文化七年七月二十七日御医師に召出され、二十人扶持を下さるとの申渡をうけて、寺社奉行前田式部の支配になつたこと。

一、文化十一年二月二十八日藩主前田齊広の許しを得て、藩医大高元哲、江間篁齊と共に和蘭人をその旅宿に訪問したこと。

一、文政三年高野長英の入門は、加賀藩儒者太田錦城の紹介によるものとされているが、当時錦城はまだ加賀藩に仕えていなかったということ。

一、文政七年八月十日不幸にして長淑は金沢にて死亡し、その墓は市内棟岳寺にあること。

しかし何故この寺に葬られたかの理由は全く不明である。長淑の菩提寺たる江戸の養源寺が禅宗であり、この棟岳寺も同じ禅宗のため、この面から何等かの因縁を想定するものもあるが、私は同僚江間篁齊のあつせんによるのではないからかと思う。

又長淑の基石にはその建設者たる十三人の名が刻まれて居たり、その各々につき多少の知見をえたこと。

一、長淑の「門人籍」には、百三十二人がのせられてい

るが、このうち加賀藩関係者は僅か六人にすぎないこと。

一、文久はじめの頃の「加賀藩組分士帳」には二十五人扶持吉田享庵（成美）の名が見え、恐らく長淑の養嗣子言善の子と思われること。などにつき申上げたいと思う。

（附記）

一、長淑の基石に刻まれてある氏名は

大高之哲、大庭探之、白崎玄令、松田東英、藤浦彦齡、白崎峯井、白崎菊井、大高美奈、小島長清、高橋三平、木屋孫七、浅野屋弥三右衛門、浅野屋次兵衛。

一、長淑の「門人籍」中、加賀藩関係者は

大高之哲、松原南岡、大庭養之、白崎玄正、藤田弘庵、白崎玄意。
（金沢市味噌蔵町・小児科）

本間玄調の伝記について

大鳥 蘭 三 郎

本間玄調（一八〇四〜一八七二）が医学者として傑出した人であることはよく知られている。玄調は華岡青洲門下の逸才として呉博士の著書の中に記されており、またシ

ポルトに従学して大いに益するところがあつたと同博士の「シーポルト先生その生涯と功業」の中に明記されている。しかしながら呉博士の前掲の両書をよく読んでみると、上に述べた二つの事柄についての説明はその根拠が必ずしも十分でないように思われる。

私は近頃この点についての好個の資料を見ることを得たので、これを紹介して大方の御参考に供したい。このものは静嘉堂文庫架蔵の小見山楓軒叢書の「諸家書簡」と題するものの第三巻に収められている本間玄調と同道偉の書簡である。

これ等によれば本間玄調が華岡青洲とシーポルトに従学したことについてのこれまでの定説をすこし補正、追加する必要があるのではないかと考える。(慶応大学・医史学)

トーマス・バルトリン著、解剖学 書の一六五三年版と一六五六年版 の図譜の比較

森 優

トーマス・バルトリン著、解剖学書の一六五三年版の図譜と一六五六年版の図譜とは、すべて、実像と鏡像との関係にある。一六五三年版の図譜が実像であり、一六五六年版のものは、その鏡像にあたる。しかし、鏡像に、しるされているような文字は実像である。

一六五六年版の図譜のを見ると、しかも、胃や肝臓のような非有対性の器官のみを見ると、内臓転位の屍体を描いたようであるが、一六五三年版の図譜と一六五六の図譜とを比較すると、内臓転位の屍体を描いたものでないことは明らかである。

一六五六年版のような図譜がどうしてできたか。当時の印刷の方法を知らない演者には、これを説明することができない。(九大・解剖)

郵便切手に描かれたオーストリア の医学者

古川 明

十八・十九世紀における、ヨーロッパ医学の長足な進歩

には、オーストリアの医学、特に新旧ウイーン学派の医学者の業績が大きな役割を演じている。オーストリア政府は一九三七年に、九名のウイーン学派の医学者の功績を称えて、九種の郵便切手を発行した。この切手シリーズは、その図案、色彩、印刷などの点において、すばらしい出来ばえを示したので、切手収集家の間で好評を博し、現在でも世界の傑作切手の一つに数えられている。

しかしながら、医史学的にも価値があると思われるこの切手シリーズも、一般の医師からは、あまり顧みられていない。そこで、わたくしは本学会で、これらの切手写真を供覧して、ウイーン学派の医学者を偲び、その風貌に接するとともに、その業績の一端にも触れてみたいと思う。オーストリアでは、その後も、医学者を描いた切手が三種発行されたので、これらを追加して、次の十二種とした。(4)から(9)までは一九三七年、(9)は一九五三年、(11)は一九五七年、(12)は一九六〇年に発行された切手であるが、そのうちに、Rokitansky のものが二種あるので、人員は十一名である。

- 1) Gerhard Freiber van Swieten (1700—1772) 内科
- 2) Leopold Auenbrugger V. Auenbrugg (1772—1809)

内科、打診法

- 3) Karl Freiherr von Rokitansky (1804—1878) 病理学
- 4) Joseph Skoda (1805—1881) 内科
- 5) Ferdinand Ritter von Hebra (1816—1880) 皮膚科
- 6) Ferdinand Ritter von Arlt (1812—1887) 眼科
- 7) Joseph Hyrtl (1810—1894) 解剖学
- 8) Theodor Billroth (1829—1894) 外科
- 9) Theodor Meynert (1833—1892) 精神科、脳解剖学
- 10) Karl Freiherr von Rokitansky (1804—1878) 病理学
- 11) Julius Wagner-Jauregg (1857—1940) 精神科
- 12) Anton von Eiselsberg (1860—1939) 外科
(東京・篠原病院・内科)

「カスパル七方」について

(蘭方製薬史第8報)

宗 田 一

閑場は「西医学東漸史話」上一六三頁において、カスパル七方の選者を河口良庵に当てている。

すなわち、閑場は長尾宗治の「カスパル流伝書」緒言に

もとずいて、京都金屋町住の平戸生れ河口良庵が多数の膏方中より十七方を撰抜して一卷となし、世に公にして銀二〇匁にて売售したものと結論している。

ところが、関場も引用している良庵編「阿蘭陀外療集」の巻四末尾に「寛文元年（一六六一）：良医庵春益謹書」とあり、巻六末尾には「慶安三年庚寅十月 日（一六五〇）」とあり「右十七方阿蘭陀外科女須戸呂、加津春口伝之通一編ニ一冊指上申候」とあつて、これらの年月は良庵出生前であるから、本書の編された年月ではない。とする、これらは良庵が用いた底本に記されていた年記であると推定できる。

いまこの仮定に立つて本書をみると、巻四の内容にカスペル以外にアルマンズ方の混在するわけが理解できる。つまりアルマンズ (Allmans katz?) はこの年には滞日していたからである。

そうなると、巻六はカスペルの帰国間際の年代で、それ以後のものの混在は考えられなくなるが、それなら良庵が十七方を選した点は疑問となつてくる。しかも、その文中「指上申候」とあるのは、一段の伝授本にはみられぬ書き方であり、売本のためのものとしてもおかしい。

この観点から諸書を調べ、次の結論に達したので報告する。

一、カスペル十七方はカスペル自身が帰国間際に撰抜した常用方と考えられる。

二、カスペル十七方は、時の長崎奉行黒川与兵衛甲斐庄喜右衛門兩人の命によつて、恐らくオランダ通詞が和解決ものを向井玄松が校訂し、慶安三年十月（一六五〇年十一月）に公儀へ提出したものと考えられる。

三、良庵の前掲書巻六はこの報告書の写か控が底本であろう。「指上申候」の意味がこれによつて理解できる。

（吉富製薬・学術課）

扶歇蘭度「原病学」と利撰蘭度

「人身窮理書」

阿知波 五郎

わが蘭学がライデン学派離脱によつて得たものはドイツの生氣論医学であり、扶歇蘭度はその代表である。蘭学医学思想のうち、フランスから採つたものは僅少であり、僅

かに広瀬元恭著、利根蘭度著「人身窮理書」はその代表である。

たとえ折衷派といえども生気論的立場にある扶氏と、僅かに移入されたフランス学派を代表できる利根蘭度とは、蘭学思想研究は一つの重要なポイントをなす。前者の「原病学」にカントの名が現れ、後者の「人身窮理書」とピシヤが現れる。これは両者の思想を代表していて象徴的である。

蘭学に於ける「細胞」思想の追求は、その意味で重要であり、十八世紀後半以後の進歩的なフランス学派の移入有無の研究は日本近代医学史では欠くことのできない必要事である。

(京都市北区北大野町・内科)

未知のシーボルト関係資料について

中野操

天理大学図書館にシーボルトの手術を記録した二点の筆写本が合綴して保存されている。Aは「メイストル・シイ

ボルト直伝方治療方写取」(紙数十八枚)、Bは「肥後家中野口律兵衛シイボルト治療日記」(紙数十一紙)であつて、ともに信陽月都(信州のことか)の宮山堂主人、宮原良碩の自筆本である。これは良碩が青囊堂即ち吉雄幸載(名種通、号素友、もと同姓圭斉の子、伯父幸載種徳の後を嗣ぎ二世幸載となる。文化十四年官命により長崎施業院外科担任)の塾に修学した文政十年五月から六月にかけて、シーボルトが吉雄塾に出向き施術した患者の病歴、処方、幸載やシーボルトの門人たちの動静を記録したもので、簡単ではあるが価値高き資料である。左にその内容を簡単に紹介しておく。

A 冊

- 症例一 諸熊仙輔 陰囊水腫
- 症例二 於岩(二〇有余) 気管外に曼頭の如き腫れ
- 症例三 西浜正蔵 痔瘻症
- 症例四 西浜正三郎(六〇有余) 咽喉発痛腐爛暖声
- 症例五 河内屋九郎右衛門(五〇有余) 咽喉カンクル
- 症例六 野口律兵衛(一二才) 頭部腫瘤

文政十年五月二十七日シーボルト摘出手術、外痔医ビルゲル介補

(中野 註) ヒルゲル Heinrich Bürger 文政八年
(一八二五) 来朝、それまでジャワの病院で薬剤師と
して勤務していた。物理学、化学、薬学、礦物学、な
どに造詣深く医学の心得もあつた。シーボルトの助手
として最も愉快に働いた。(古賀十二郎著「西洋医術
伝来史」二五五頁)

B 冊

野口律兵衛(一二才)の手術日記

頸部脂肪腫、周径鯨尺九寸、高さ一寸五分。摘出手術五
月二十七日九ツ半(午后一時)開始、八ツ時(二時)終
了。「治術中痛ミヲ忍ビ敢テ叫喚セズ、マコトニ武士ノ
心意、満坐之ヲ感嘆称賛ス。術後笑談如常」
当時青囊堂在塾者の氏名次の通り。

井上有季(明石)、田原文迪(豊後)、石川玄林(山和)
川村文甫(防州)、黒山齊宮(筑前)、豊田幸林(萩家中)
生島元民(筑後)、杏下菊二(長崎)、姉山勘二(同)、
森岡圭斉(明石在)、清水篤斉(阿波)、佐藤文哉(土佐)
中根元庵(彦根)、吉田達中(播州)、畑玄周(富山)、
宮原良碩(信陽月都)

その他A B二冊に登場する氏名は、日野鼎哉、楢林栄

建、日高涼台、位一、周吉、玄晃、元甫、専次郎、圭哉、
周延、数馬、与一、震之介、留吉、貞四郎、栄左衛門、斎
良庵、平馬、宗庵、孝伯、新作、良吉、宗謙、栄彦、三宅
清海、研介、玉振、雲徳、周一、敬作、長央、(英カ)、
救庵 (関西支部長)

尾台榕堂の生い立ち(第一報)

吉田 一郎

幕末から明治維新へかけての一大変換期にあつて、古方
医家の雄たり得た榕堂先生は、雪深い北越は魚沼郡妻有郷
中条(現在の十日町市中条)の小杉家に生れた。

幼にして俊敏だつたこの村童を啓発したのは、その父祖
以外に一偉材があつた。それは菩提寺に住職だつた維寛雨
新庵何笠とも号した禅師その人である。この師は江戸駒込
の吉祥寺で刻苦精勵し業成つて故山に就いただけあつて、
天下の名家とも交遊があつたので、勢い村童も青雲の志を
立てて郷関を発足し、出府して当時の名家尾台塾に入学し
て十年郷里の老母と長兄の病痾に際して帰国を迫られた。

郷里ではこの新進青年医家を遇するに厚く、患者は遠近からその方技を求めて蝟集し、文字通り門前市をなし令兒も準養子や妻女の縁組をして永住を計つたのであつた。

江戸安政の大火はその恩師であつた尾台浅岳一家を焼き、ついで逝去された飛報を得、とりあえず出府し、遺族の要請もだし難く、再度生家を離脱し、その遺子を守るために尾台良作を襲名し四十の星霜を市井に居し、学・術を兼修その大成を遂げたのであつた。その証は当時の最大の榮譽である徳川大將軍に単独賜謁を得、侍医に招ぜられたが、先生は次の三条の許容を得てその儀を受命した。

一、頭髮を剃らぬこと。

二、定時登域を外して、要時出勤のこと。

三、市井の患者の診察続行をかまわぬこと。

右は当世の異数として伝えられ、学者から『三好齋』の稱を得たほどであつた。

従来の榕堂に関する墓碑銘(草稿)や伝記は以上に関する詳細を欠くので報告を試みる。(埼玉深谷市本町・葉学)

明治初年における皇漢医道御用掛

の医史学的意義

石原明

徳川將軍より政治の大権を返還させた明治政府は、すでに京都にあつた時より医事には甚だ関心を示し、御親兵病院の設立、医道振興の太政官布達などにその具体例がみられる。

明治政府が幕府から引継いだ医療施設三カ所のうち、慶応四年(一八五八)六月二六日に医学所を復興し、正式には翌二年一月十七日に昌平校、開成所と共に開校して新入生の教育を開始したのであつた。この頃にはすでに各施設とも『学校』の名に改められていたらしい。

かくの如く三校ともに独立していたので政府は、これを統一して一つの体系下におく必要を感じ、明治二年(一八六九)六月十五日昌平学校を『大学校』と改め、開成、医、兵の三学校をこれに配することとなつた。この際に大学校の構想の根柢をなしたものは、王改復古に力を得た急進的国粹派の国学者たちの考えであつた。

平田鉄胤を中心とするこのグループは、道の体と用を究めて、皇道を弁すべきであると説き、ついに教育政策の具

現にまで到達したのである。

政府機構はこの方針の下に改められ、八月二日には大学校開校に先立つて『学神祭』を執行した。これがのちにまで尾を引く事件の発端で、ついに年末には『大学東校』と改称の上、国学者らは学制から手を引くに至る。

このような経緯の中で明治三年後半に設けられた変則的な役目が皇漢医道御用掛である。

従来、この係については不明な点が多く、ほとんど解明されることがなかつたが、その実際活動は医学界に何らの影響を与えなかつたとはいえ、これが存在した理由と必然性、とくにその中心人物であつた皇国医道の鼓吹者権田直助の医学観について考察した結果を発表したい。

(横浜市大・医史学)

同志社におけるベリーとリチャーズ

ズ

長門谷 洋治

明治一六年、京都の同志社では医学校設立の議がもちあ

がり、当時岡山にあつたベリーを招いて創立協議会がもたれた。ベリー(John C. Berry 1847—1936)は明治五(一八七二)年、アメリカの伝道医として来日、神戸、ついで岡山にあつて医療、監獄改良事業などに従事していた。キリスト教主義の私立学校である同志社の新島襄が、医学校設立にあたつてまずベリーを登用しようとしたのはきわめて自然のことであつた。しかし経済的な理由や、ベリーの考えから最初より医学校設立を行なわず、まず病院と看護婦養成より着手せんとした。ベリーは明一七・七より翌年九まで帰国し、設立資金獲得につとめ、一方専門看護教育者を求めたが、これに応じたのがリチャーズである。リチャーズ(Linda Richards)は一八四一年生、ニュイーンランド病院看護婦学校を卒業して、米国最初の資格看護婦となり、ベレヴェニュー病院その他を経、ナイチンゲールに会つたこともあるが、市立ボストン病院在職中にこの募集をみた。明一八・一二米国を発ち、翌年一月来日、京都におちついた。追つて同志社病院・京都看護婦学校は明二〇年一月正式な開院・開校をみた。ベリーは院長、リチャーズは看護学の教師であつた。リチャーズの同志社における教育・生活などについては、その自伝(一九一〇)に

詳しい。かくて京都看病婦学校は、わが国看護教育における先駆者的役割を果し、その及ぼした影響も大であるが、明二三年リチャーズが、明二六年ベリーが夫々離日するに及んで同院・同校はむしろ衰微の方向へ進むようになった。

私は、比較的初期に優れた企画と人材を得て発足した、この同志社の事業を高く評価するとともに、この二外人の人格と業績をも大きく評価してよいと考える。とくに近代看護学を紹介したりリチャーズの意義は重要である。

しかし、彼らの努力は十分実つたとはいえない。それに①は同志社、ひいてはわが国に十分これらを受け入れる素地が整つていなかつた ②同志社が私学であつた ③わが国の医学がドイツ医学を主にしていた などをあげるこゝとができる。このためもあつて、ついに当初の目的である医学校の設立をみなかつた。このことはわが国に現在なお、キリスト教系大学の医学部のないことと考えあわせ、興味ある点である。

最後にベリーとリチャーズに関する資料・文献は故佐伯理一郎がよくこれを収集・保管、現在も関係者の手にあるため研究が比較的容易で、これがわが国のみならず世界の

医学史・看護史に貢献するところは大きいと考える。

(大阪・日生病院皮膚科)

明治期輸入医学の研究様式(Weise)と研究手段(Mittel)との関係——比較医学史の方法のための試み——

——衛生学(ペッテンコーファー学派)

の場合について——

野村 拓

山城 正之

それぞれの科学は個有の方法と領域を持つ。この方法と領域、つまり体系を、研究様式と研究手段に分けると、ある科学の研究様式が他の科学の研究手段であり、又ある科学の研究手段が、他の科学の研究様式を規定しているという研究一般の階層関係すなわち構造が理解される。

科学の源初においてそのいずれが母であるかは考慮の外におくとしても、研究機関の設立、研究誌の発刊などアカ

デミー成立後の、科学の輸入（うらがえせば影響）を媒介にした両者の関係を考察の対象にすることは、日本医学史のためのみではない、ひろく比較医学史という観点における方法であると史料される。

明治期衛生学の輸入の場合を事例にして考察する。輸入対象の衛生学と主な考察点はつぎのようなものである。

A 輸入対象の衛生学（ペッテンコーファー学派）

ペッテンコーファー（一八一八一—一九〇一）はリービヒの下で胆汁（ノ四四）、クレアチン（ノ四七）週期表の前駆的業績（ノ五〇）らをあげたが、三十才近くまで自らなそうとするところの未知な青年であつた。五一年、バイエルン王の諮問により空気環境へとりくみ、有名な呼吸器（ノ六一）を経て、六五年の衛生学講座の設立、八二年の「教科書」、翌年の「宝函」に至る。この間、研究様式を最も直截に示すものは七三年の二つの「通俗講演」であつた。

B 主な考察点

(1) 緒方正規は最初に接触した日本人であつた。ペッテンコーファー学派にとつて細菌学は一つの手段であつたが、これのベルリンからミュンヘンの移入に力があつた。帰朝後、彼は研究様式としての細菌学に力を注いだ。

(2) 七三年の「通俗講演」は、後藤新平（国家衛生原理 明治二二年）、長谷川泰（済生学舎医事新報 明治二六年）が紹介、自論に用いているが、大学衛生学にかかわることはなかつた。

(3) 日本における衛生学の業績において、労働科学研究所（倉敷）の業績は一際大きいが、ここにおけるガス代謝の研究手段も、ペッテンコーファーの呼吸器とは断絶したところでブルーガーらの系譜にあるツンツラの系譜に立つものの積極的移入であつた。

さらにいわゆる衛生化学の日本における社会的ポスチャの弱さ、いわゆる社会医学のフレームワークの不明確さなど今日的課題への接近における様式と手段との分裂的定着のもつ考察点に言及したい。

（阪大・衛生）

明治前期における衛生行政の展開

過程

松田 武

明治期の医事制度、衛生行政についての制度史的側面か

らの研究は先学によつて尽されているといつてよい。この報告の視角は制度史的ではなく、明治絶対主義国家創出過程のなかで、衛生行政のもつ役割が如何に位置づけられ、その条件のなかにあつて、衛生行政組織編成と活動が、当初「医制」のプランをどのように実現しえたかを構造的に把握することにむけられている。したがつて具体的には、衛生行政活動の展開が、町村衛生委員、府県衛生課、地方衛生会の廃止により、挫折したといわれる明治十九年の画期を中心に、一般地方行政の行づまりと公立、私立医学専門学校の激減化、地方自治制の反動的変貌、警察制度における集兵警察より散兵警察制の確立過程等々の諸側面との関連で考察を加え、特にその象徴的表現である、衛生行政官僚（内務省衛生局長長与）と中央国家官僚（内務大臣山県）らによる地方自治制の展開過程にあらわれた、「自治」理念に示された相違およびその構想の違い等をめぐる点に焦点をあて検討を加えたいと考えている。

（阪大・衛生）

アメリカの医史学者を訪ねて

鮫島 近二

一九六三年十一月から約半年間、アメリカ各地を歴遊し、とくに医学史料収蔵の大学や図書館を訪ね、またカリフォルニア大学ではラインハルト教授、イルザ・ペース女史、ミナミ女史などと会見した印象につきスライド供覧により発表する。

（東京都新宿区下落合・眼科）

封建制下の農民の保健状態（第一報）

——過去帳その他古文書利用による畿内

一山村の人口変遷——

松田 武

官庁統計以前の非官庁資料の科学的活用法の開拓によつて、わが国の場合、明治以降一〇〇年の官庁統計資料の歴史にさらに数百年の資料をつみあげることができ、それに

よつて数世紀にわたる民族の健康、寿命等の長期にわたる見通しがえられる可能性が与えられる。すでにヨーロッパにおいては一七世紀以降その試みがなされ、貴重な資料を提供しているが、わが国にあつては今日までその試みが見すごされ、貴重な史料が散逸の運命にある。現在それら史料の保存、記録化が要請されるゆえんである。

本報告は農民の健康状態の解明の第一歩として、近世後期の一地域の人口変遷を考察した結果である。大和国吉野郡高原村（現在川上村高原区）山林に囲まれた標高三〇〇米にある封鎖的村落で、村経済は木地生産を主とし、農業は畠作のみで副次的である。このような手工業者集団の形成は中世末—近世初頭と考えられており、村落形成もそれより、そう降らないといわれる。封建社会下のこのような特殊の集団として当然ながら、通婚圏も一般農村と比して極めて狭い。しかし商品流通圏内に早くからおかれているため、不作による饑饉による影響に対する抵抗は非常に弱い。本報告では徳川封建制社会での人口停滞の要因として、一般的に墮胎、疫病流行、および饑饉があげられるが、その停滞的現象の実態を、とくに天保八年を中心として考察する。

（阪大・衛生）

第一九回国際医史学会総会予告

会期 一九六四年九月七日—十二日

場所 スイス パーゼル

会長 Prof. Dr. H. Buess.

副会長 Prof. Dr. F. Heinemann, Prof. Dr. G.

Wolf-Heidegger.

幹事長 Prof. Dr. R. Blaser.

会計担当者 J. Vogt, Swiss Bank Corporation,

Basel, Swiss

申込みは一九六四年四月三十日まで、会費一六〇スイスフラン同伴者は九〇スイスフランを右の会計担当者へ送金のこと。

演説使用語英・独・仏・伊であること、一題の時間は主要テーマで二〇分、それにつぐもの十五分、短い報告は十分

主題は (1)、ヴェサリウスとその時代 (2)、治療法の歴史

(3)、スイス国の医学史上の寄与、その他は四グループ（古代、中世、精神科の歴史、自由討議）に分れて会談する。

本会を代表して大矢全節理事が出席の予定。

医家先哲遺墨展のお知らせ

会期 昭和三九年五月二六日（火）——二八日（木）午前

十時——午後四時三十分

会場 東京大学医学図書館二階展示室（東大薬学部向側、

一号館と病院の中程）

内容 三楽病院元院長の坂本恒雄博士多年の収集に係る各

時代の名医遺墨を中心に他の收藏家のものを集め百

余点解説展示

主催 日本医事新報社

協賛 日本医史学会

日本医史学雑誌 第十一卷第一号 ©

一九六四年五月二四日発行

発行 日本医史学会

東京都文京区本郷一丁目一番地

順天堂大学医学部医史学教授室

印刷 有限会社 共信社印刷所

東京都文京区江戸川町九番地

Particulars of the Members' Presentations

Kido Sugita : Studies on fiends in "Dozikyo" and "Kyuryo-syoni-shippei-Kyo".....	(6)
Sakae Miki : A Study on medical documents of the Central Asia, its bibliography.....	(6)
Masanori Imaichi, Yoshiko Imaichi : On the drugs for sanitary use in the so-called deserter's village.....	(7)
Keisho Hakura : on the publication of "Gedai-Hiyo" by Toyo Yamawaki	(7)
Kaneyosi Akamatsu : Studies on the manuscript of "Zatsuryo-ho" written himself by Temmin Namikawa.....	(8)
Shinzo Tsuda : Choshuku Yoshida and the Kaga-Clan	(9)
Ranzabro Ohtori : Some problems on the biography of Gencho Homma	(10)
Masaru Mori : Bibliographical comparison between the anatomical charts (1653 and 1656) of T. Bartholin	(11)
Akira Furukawa : Austrian doctors in the postage stamps	(11)
Hajime Soda : Studies on the 17 therapeutics of Casper	(12)
Goro Achiwa : W. C. Hufeland "Pathology" and A. B. Richerand "Physiology".....	(13)
Misao Nakano : On two unknown materials of Dr. von Siebold	(14)
Ichiro Yoshida : Yodo Odai's personal history (Report 1)	(15)
Akira Ishihara : Medico-historical meaning of "Kokan-ido Goyo-gakari" of Tokyo university in Meiji era	(16)
Yoji Nagatoya : Dr. J. C. Berry and Miss L. Richards in Kyoto Doshisha	(17)
Relation between "Forschungsweise" and "Forschungsmittel" recieved system of medicine in Meiji era—A trial for method of comparative history of medicine —in the case of hygiene (Pettenkofer school)	Hiroshi Nomura, Masayuki Yamashiro (18)
Takeshi Matsuda : Evolution of the health administration during Meiji era	(19)
Kinji Samejima : Interview with American medical historians	(20)
Takeshi Matsuda : States of farmer's health during "Fendalistic Period in Japan" — An Observation of population change of a mountain village through diplomatics and necrology analysis	(20)

NIHON ISHIGAKU ZASSHI

Journal of the
Japanese Society of Medical History.

Vol. 11. No. 1

May, 1964.

CONTENTS

The 65th General Meeting of the Japanese Society of Medical History.

(24. May, 1964. Juntendo Univ.)

Special Address	(1)
History of the Orthopedy in Japan Hiroshi Kambara.....	(1)
President's Address	(3)
Tsukumo Ohno, a student of the Daigaku-Toko, and his work "Kaitaigaku-gosen" Teizo Ogawa	(3)
Members' Presentations	(7)

The Japanese Society of Medical History.
c/o Department of Medical History.
Juntendo University, School of Medicine.
Hongo 1~1, Bunkyo-ku, Tokyo.